

第二十一回蒼天句会 今月の一句

令和六年七月十一日 兼題…蛍、又は自由

待つといふ昂ぶりのあり蛍狩 公子

世知辛い時をゆるめて蛍とぶ 婦紗子

手のひらにふわりと蛍寺の径 賢一

蛍火に人静まれり橋の上 繁一

六月の風はブルーや紫雲木 孝志

蛍火やうなじ束の間しろく映え 輝明

目つぶれば遠き昔の蛍狩 ムツミ

雨上がり沓脱石の蛍かな 信江

梔子の花に聞かせて独り言 静江

塞ぐ手の隙間を覗く蛍かな 鎮夫

蓮池に白鷺一羽降り立ちぬ 隆彦

吹つきれて籠の蛍を野に放つ 重子

松蝉やパラグライダー 大空に 紹子

畦道の草や蛍の宿なるか 久恵